石座神社遺跡（いわくらじんじゃ）

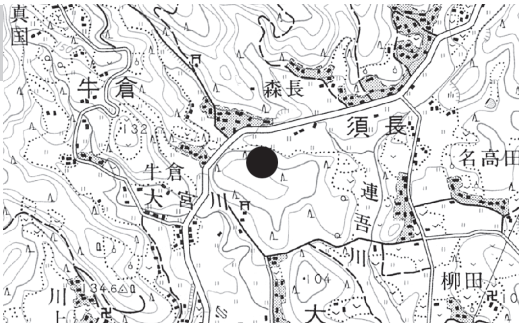
所　在　地　新城市大宮
（北緯34度55分38秒 東経137度31分10秒）

調査理由　第二東海自動車道横浜名古屋線

調査期間　平成22年5月～平成23年３月

調査面積　10,330㎡

担　当　者　松田　訓・早野浩二・日吉康浩



調査地点（1/2.5万「三河大野」）

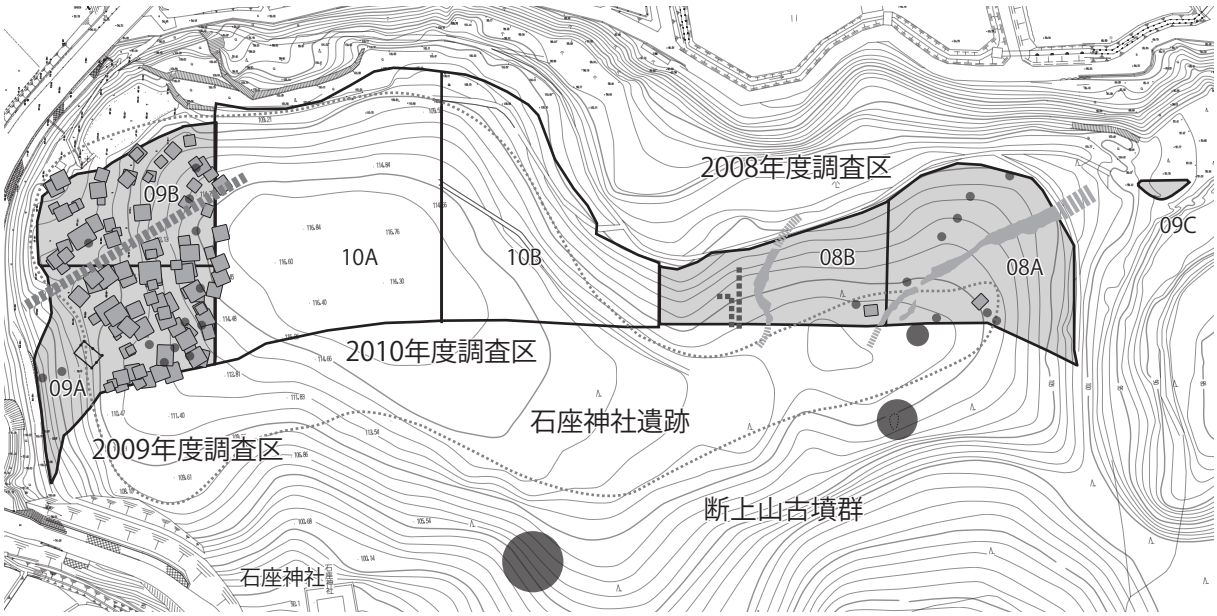
調査の経過　本調査は、第二東海自動車道横浜名古屋線にかかる事前調査で、中日本高速道路株式会社豊川支社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成22年５月から平成23年3月までで、調査面積は10,330㎡である。なお、平成20年度には丘陵東端部の5,200㎡、平成21年度には丘陵西端部の4,720㎡の調査をすでに実施している。

立地と環境　石座神社遺跡は、豊川中流域右岸の上位断丘面上に立地する。段丘面下の東西には連吾川と大宮川が流下し、段丘面上は舌状の平坦地を呈する。遺跡周囲の標高は約110mで、段丘面下との比高は約30mである。

同じ段丘面上には10基の古墳から構成される断上山古墳群が分布し、段丘面の南端付近には、前方後方墳の断上山10号墳（全長約50m）と弥生時代後期から古墳時代に継続する南貝津遺跡が立地する。また、連吾川に面した段丘下には、平安時代・鎌倉時代を中心とする加原遺跡、大宮川に面した中位段丘面上には、弥生時代後期・古墳時代前期の遺跡である吉竹遺跡が立地する。

調査の概要　今年度の調査は、段丘面上の平坦面と北向き斜面を対象とした。調査の結果、縄文時代、弥生時代後期・古墳時代前期、古代・中世、近世以降の遺構と遺物が確認された。以下、内容が判明したA区を中心に調査の概要を記述する。

縄文時代　縄文時代の遺構としては早期前半の煙道付炉穴5基、石囲炉を伴う中期後半の竪穴住居1棟、筒状・袋状の大型土坑が18基確認されている。



石座神社遺跡調査区配置図（1:2,500）

煙道付炉穴は二等辺三角形（3580SL・3590SL）及び倒卵形（5050SL・5060SL）の平面形を呈しており、2基を1単位としてつくられている。煙道側の壁面は著しく被熱しており、検出時は焼土がV字に広がるような状態で検出された。3590SL・5050SLの底面からは押型文土器の破片が出土している。

竪穴住居（3001SI）の平面形は3×2.2mの楕円形を呈しており、石囲炉は礫を長方形に並べてつくられている。石囲炉周辺からは深鉢の破片が1個体分出土した。

大型土坑は径1.5m、深さ1～2m程の規模が多く、底面において小土坑が検出されるもの（3800SK）が多いことから陥穴の可能性が考えられる。

その他の出土遺物としては、縄文土器、尖頭器・石匙・石斧・石鏃・石棒等の石器がある。なお、石棒は晩期に帰属するものと考えられる。

弥生時代後期・古墳時代前期

弥生時代後期・古墳時代前期は本遺跡において遺構・遺物が最も濃密な時期であり、10A区の丘陵西側緩斜面及び頂部平坦面においては、約170棟もの竪穴住居及び約10棟の掘立柱建物が重複した状態で確認された。竪穴住居の多くは地床炉、貼床、周溝を伴っており、なかには複数の地床炉を持つものも存在する。主柱穴配置は、明瞭なものと不明瞭なものが混在する。

丘陵西側緩斜面に建てられた住居は平面形が一辺4～5mの方形を呈している。緩斜面の掘立柱建物は等高線に沿うかたちで南北方向に列をなしてつくられており、桁行5m・梁間3m程のものが多い。

丘陵頂部平坦面は緩斜面に建てられたような規模の住居に加え、一辺7～9mの大型住居（3149SI・3261SI・3145SI・3150SI・3388SI・3407SI・3380SI）と大型掘立柱建物（3300SB・5000SB）の存在が特徴的である。大型住居のなかで3149SIは本遺跡最大の竪穴住居であり、その規模は9.3×9.0mである。構造の特徴として周壁に1.5～2m間隔（コーナーのみ近接）で小柱穴を持つことが挙げられ、壁立ち式竪穴住居と考えられる。なお3407SIも壁立ち式竪穴住居の可能性がある。大型掘立柱建物2棟のうち3300SBは桁行7m・梁間5mの規模で、桁行の一方の柱掘方が布堀り状を呈し、梁間の柱間が広い特徴を呈する。また3388SI・5000SB付近には、これに対応する可能性のある柵列も認められる。

その他特徴的な住居としては、一辺約3mの小型住居（4459SI・3947SI等）、地床炉に支柱石を埋設した住居（3308SI・3742SI等）、いわゆる馬蹄形遺構を伴う住居（3216SI・3321SI・3609SI等）、床面上に粘土塊が残されている住居（3002SI等）、粘土貯蔵穴を構築する住居（3742SI）、焼失住居（3002SI・3328SI等）、土器が大量に廃棄された住居（3283SI・3742SI等）などがある。

出土遺物は竪穴住居内を中心に検出された。今年度の出土遺物で最も注目されるものは3002SIから出土した、方格規矩四神鏡を分割した破鏡である。破鏡の破断面は丁寧に研磨され、懸垂用の穿孔が2孔穿たれている。土器は台付甕・高杯・広口壷・瓢形壷・小型壷・鉢といった各器種が検出され、同時にS字甕・パレス系壷・菊川式系の壷や高杯といった他地域系土器も検出された。その他、線刻土器、大型管状土錐・土玉・ミニチュア土器等の土製品、砥石・石製紡錘車・石製加工円盤等の石製品、鉄ヤリガンナ・板状鉄斧等の鉄製品も出土している。またごくわずかではあるが金属器生産の可能性を示す遺物も認められ、大型掘立柱建物3300SB付近の3282SIから粒状滓、4340SIからは板状の青銅製品が出土した。

古代・中世

古代・中世の遺構としては調査区を東西に走る大溝（1900SD）、10A区北側緩斜面にお

主要遺構配置図（1:500）

いて中世前期の竪穴状遺構（3531SK・3530SK・3129SK等）及び火葬骨を伴う土坑（3900SK・4000SK）が確認された。

大溝は断面が逆台形を呈しており、規模は幅約1.5m・深さ約1m程である。大溝には部分的に地山を土橋状に掘り残した施設がみられる。大溝からは須恵器数点と土師器皿が出土したことから、大溝の時期は古代から中世と考えられる。

中世前期の竪穴状遺構は北向きの丘陵斜面を掘削して構築されたもので、一辺3～5mの規模である。遺構からは山茶碗が出土した。火葬骨を伴う土坑は径0.8m、深さ0.5m程で、土坑から下層骨以外の遺物は出土していないが、周辺からは六文銭が出土している。

近世以降　10A区北側の緩斜面おいて、窯体（3200SY）が確認された。煙道・焼成室・焚口・前庭部灰層等の残存状態は良好である。焼成室は半地下式の構造で、径約1.5mの円筒形を呈する。煙道の先端部は礫で四方が囲まれていた。窯体の周辺からは近世以降の瓦と陶器が出土した。窯体構造や灰層の産状から、3200SYは近世以降に構築・使用された炭焼窯と考えられる。

まとめ　本遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての拠点的な集落であり、今年度の調査では、大型竪穴住居や大型掘立柱建物で構成される集落の中心施設の様相が明らかとなった。特に破鏡の出土は三河地方における初例であり、県内では名古屋市高蔵遺跡の虺龍文鏡（破鏡）、清須市朝日遺跡の虺龍文鏡（破鏡）に次ぐ古い鏡である。また、東日本の集落遺跡から出土した中国鏡としても数少ない貴重な例となる。このような遺構・遺物の内容から、遺跡は同一丘陵上に存在する断上山10号墳に対応する首長居館を擁していたと考えられる。

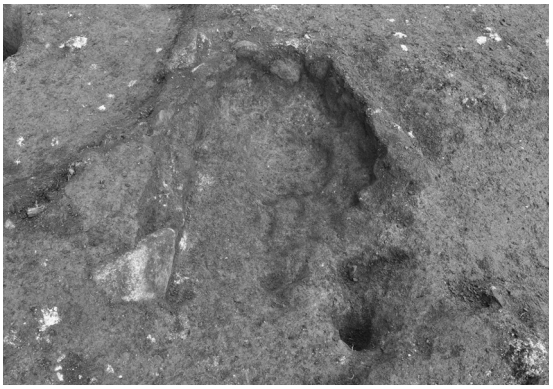
縄文時代については、今年度までの調査を通じて断片的ながらも、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の各時期の特徴的な遺構・遺物を検出した。これらは当地域の具体的な様相を知るための好資料になるものと思われる。　（早野浩二・日吉康浩）

10A区全景（北から）

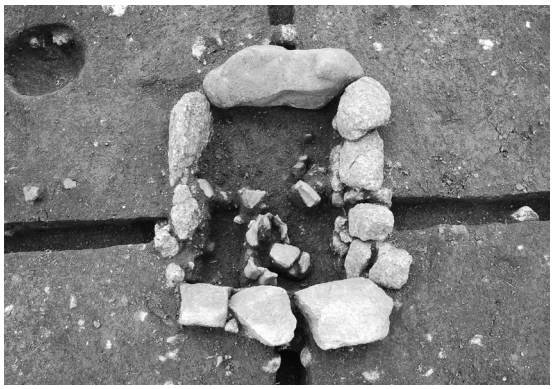
10A区全景　（西から）

10A区全景（東から）

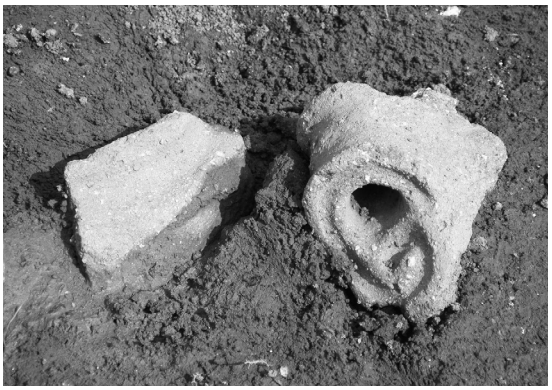
平面二等辺三角形の煙道付炉穴（3580SL）



平面倒卵形の煙道付炉穴（5050SL）



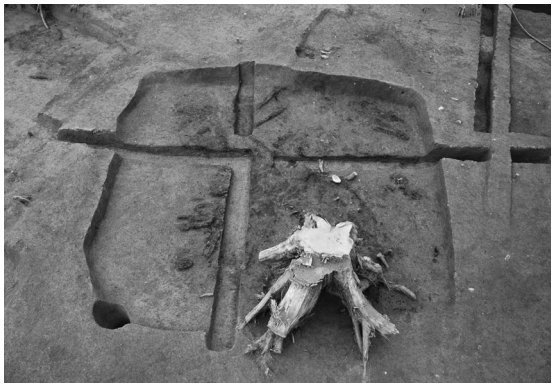
石囲炉（3001SI）



石囲炉周辺の縄文土器（3001SI）

大型土坑（3800SK）

石棒



焼失住居（3002SI）

3002SI出土の破鏡

壁立ち式の大型竪穴住居（3149SI）

大型掘立柱建物（3300SB）

小型竪穴住居（4459SI）

支柱石を埋設した地床炉（3742SI）

10A区平坦面竪穴住居群（西から）

10A区平坦面竪穴住居群（南から）

土器が廃棄された住居（3742SI）

柵列

古代・中世の大溝（1900SD）

近世以降の炭焼窯（3200SY）